



戦後 70 年、この国の将来を巡る動きが風雲急を告げる中、沖縄の歴史と現実をこの目で確かめるべく、「沖縄、思い旅」を企画。脚の術後 1 年の阿部哲男先生と私（佐藤俊隆）の 3 泊 4 日の旅。出発予定は 2015 年（平成 27 年）8 月 23 日。しかし、台風 15 号の直撃により、やむなく中止。10 日遅れの 9 月 3 日（木）、仙台空港を出発。

2015. 09. 03 木曜日

11 時 55 分仙台空港発の ANA に搭乗すべく、30 分前に出発ロビーに入る。

喫煙室で一服を終え出口に向かったところで、サングラスをかけたいかつい男とすれ違う。

「うん？あれは大久保監督？」

どうやら翌日のソフトバンク戦に向け、移動途上のようなのだ。

続いて、手荷物検査を終えてロビーに姿を現したのは、銀次、藤田、嶋、松井稼頭央、ペーニャ、ウィラー、西田、青山。少し遅れて、福田、北川。最後に、松井裕樹。

やや窮屈そうな紺のスーツに身を包んだ松井裕樹は、諸先輩にペコペコ頭を下げている。

よほど近寄って握手を求めようかとも思ったが、そこは大人の判断をして、遠くからアイコンタクトを試みるだけにとどめた。

15 時 05 分、那覇空港着。

機内は空席が多く、CA も手持ちぶさたな様子。乗客の前であくびまでする始末。

■ 首里城

トヨタレンタリースでヴィッツを借り受け、首里公園へ。

到着後、真っ先に探すのが喫煙所。

何人かに尋ね、ようやく探し当て、中国人ファミリーらしい一行と一服。

石垣の城壁を縫うように高度をかせぎ、那覇市内を一望できる「西（いり）のアザナ」で記念撮影。奉神門をくぐり、御庭（うなー）に立つ。

正面に建つ首里城正殿は西を、つまり中国を向き、南殿（右下の写真）は北を、つまり日本を向いて建

てられている。

「やはり、そういうことか」と納得顔の阿部先生。

5時から始まる無料ガイドツアーに参加し、琉球・沖縄の歴史や首里城の説明を聞く。

駐車場に戻る途中、さっきの喫煙所で一服。

隣には夕涼みがてら紫煙をくゆらせるおじいが一人。

話すうちに、沖縄県立工業高校の教員（来年3月の退職を心待ちにしている）であることが判明。

普天間・辺野古を巡る状況、経済状況や沖縄の子どもの学力や進路などの話題で、小一時間ほど話し込む。



2015. 09. 04 金曜日

■ ひめゆりの塔、ひめゆり平和祈念資料館

慰霊碑に献花を行い、資料館に向かう。



慰霊碑の前には、沖縄戦当時、陸軍病院第三外科壕として使われたガマが大きく口を開けている。



スカイブルーの空を背景に、玄関左脇の棚から薄紫のやさしい花が咲きこぼれ、正面玄関のガラス越しに、手入れの行き届いた中庭の花々が見える。



中庭のまわりをサンダンカ（沖縄の庭では定番の花らしい）の紅い花が縁取っている。



秋の修学旅行シーズンはこれかららしく、心静かに展示と向き合うことができた。

運良く、旧陸軍壕の前で、沖縄戦当時ひめゆり学徒隊に所属していた語り部（87）の方の話を聞くことができた。自らに鞭打ち辛く厳しい体験を語る語り部の周りには、いつの間にか大きな人垣が。

この資料館は、国や県の補助金などで建てられたものではなく、戦争の悲惨と非戦を後世に語り継ぐために、沖縄県師範学校女子部と第一高等女学校の同窓会の会員が浄財を持ち寄って、設立したのだという。

そのことを初めて知り、あらためて生き残った彼女たちの思いの強さを感じた。

■ 平和祈念公園、平和の礎、沖縄県平和祈念資料館

「沖縄、思い旅（うちなー、うむいたび）」にこの場所は欠かせない。

阿部先生の思いをのせて、ひめゆりの塔から 10 分ほどで平和祈念公園に到着。

軍人、民間人、日本人、外国人の別なく、沖縄戦で犠牲になった全ての人々の名が刻印されている「平和の礎」。沖縄県は市町村ごとに、本土は都道府県ごとに、そして、国ごとに。

24 万人以上の名が刻印された黒い御影石が何列も続く。



「平和の礎」の向こうには、エメラルドグリーン沖縄の海が遠く水平線まで広がる。

そして、明るい陽光に映える美しい芝生。

テレビなどで何度か目にして知っているつもりだったが、その規模の大きさと美しさに圧倒される。



芝生のアプローチを、平和祈念資料館に向かう。

展示コーナーの最初は、沖縄県民が主として動員された南太平洋の島々の植民地化の様相と太平洋戦争の実相に迫る展示。

メインは、写真や遺品、映像など、沖縄戦に関する貴重な資料の展示。

映像は米軍が記録映像として残したものだ。その生々しさと悲惨さに言葉を失う。

今年の夏は、被害者としての立場を強調した証言や記録がテレビで多く報道されたが、戦前戦中の加害者としての立場こそ忘れてはならないと、あらためて肝に銘じる。

戦争の惨禍を繰り返してはならない。

展示を見終えて、喫煙所へ。

1本目に火を点けたところに、薄いカーキ色の制服を着た集団がもう一つある灰皿のところに殺到する。その数、30人ほど。

遅れてきた一人に、「どのような団体ですか」と私。

予期せぬ質問に、表情を硬くして一言、「自衛隊です」

彼らも研修に訪れたのだろうか。

国会が安保法案に揺れる中、彼らの心境にも複雑なものがあるに違いない。

■ 斎場御嶽（せーふぁ・うたき）

南城市物産館に立ち寄り、少し遅めの昼食「沖縄そば」を注文する。

コーレーグースをたっぷりかけて、「沖縄そば」を賞味する。これがなかなか上手い。

しかし、わが阿部先生はしょうが味のスープに「???」、どうも口に合わなかったらしい。



物産館でチケットを購入し、御嶽に向かう。

空を覆い始めた黒雲からポツリポツリと雨が落ちてくる。日頃の行いがよいせいか、ほどなく雨が上がった。

ひめゆり資料館と平和祈念公園でかなりの距離を歩き通した阿部先生の脚は悲鳴をあげている。

御嶽に向かう歩道は、どこもごつごつして傾斜もきつい。加えて頼りの手すりもほとんど設置されていない。

意を決して、降りてくる人に「後どれくらいですか」と尋ねる。

返ってくる答えは、決まって「すぐそこですよ」。

しかし、汗まみれになり一步一步祈るように進む阿部先生にとっては、気の遠くなるような距離。

「どこがすぐそこなんだ」

「歩くのがつらいから『後どれくらいですか』と聞いているんだ、『大丈夫ですか』の一声ぐらいかけるよ」

道を尋ねる度に、阿部先生のイライラが募ってくる。



神の宿る静謐な空間。自然の造形の妙。

ついに到着。阿部先生の表情もどこか晴れ晴れしている。

三角形に空間を切りとった三庫理（さんぐーい）をくぐると、遠く神の島・久高島が見える。訪れる人は皆、祈りを捧げる。

■ 佐喜眞美術館

沖縄二日目の最後の見学地は、佐喜眞美術館。

敷地は、一方を除いて、すべて普天間基地のフェンスで囲まれている。

この日は、滑走路に駐機する米軍機やオスプレイの姿はなく、鳥のさえずりさえ聞こえる。

残念ながらと言っているのだろうが、轟音と振動で会話もままならぬという日常の姿は、まったく想像できない。

出口に展示してあったシーサーを買い求める。

受付の女性に宮城から来たことを伝えると、大学で指導を受けた恩師が宮城出身とのことだった。



佐喜眞美術館の屋上にて、後ろは普天間基地



美術館脇の佐喜眞家墓地－沖縄独特の亀甲墓

□ 沖縄戦の図 （たて4m×よこ8.5m）

代表作「原爆の図」で知られる丸木位里・俊夫妻の作品。

日本軍に強制され多くの命を奪われた久米島の「集団自決」の事実を描いたもの。
訪れる者の心をとらえて離さない。
沖縄を訪れたなら、必ずこの美術館に立ち寄り、「沖縄戦の図」の前に佇んでほしい。



↑ 丸木位里・俊夫妻が《沖縄の図》に書き添えたメッセージ（左下隅）

恥ずかしめを受けぬ前に死ね
手りゅうだんを下さい
鎌で鋏でカミソリでやれ
親は子を夫は妻を
若ものはとしよりを
エメラルドの海は紅に
集団自決とは
手を下さない虐殺である

丸木位里・俊



← 沖縄戦の図 右下を拡大したもの

■ 木曜夕方から土曜朝までの滞在中、何度となく訪れ寛いだ喫煙スペース



禁煙スペース前で商う朝市の小父さんと



この日昼前に行われる琉装の結婚式リハーサル

■ 伊芸サービスエリア

那覇 I C から沖縄自動車道に乗る。沖縄の車は平均 80 k m 程度。結構安全運転なのにびっくり。

伊芸サービスエリアでちょっと一息。

バナナとマンゴーのミックスソフトを注文、あまりのボリュームに唖然。

一服していると「南城市島ぐるみ会議」と表示されたバスが到着し、おじい、おばあが、次々降りてくる。

「もう基地はこりごり。戦争も絶対だめ。その思いは我々の世代より、母親の世代がはるかに強い。昔は『欲しがりません、勝つまでは』と教えられたもんだが、今の気持ちは『もうこれ以上我慢できません、ウチナー（沖縄）は』ですよ」

と語るのは、これから辺野古へ向かうという旧佐敷村のおじい（写真下）。



この3日間一度も田んぼを見ることがなかったため、理由を尋ねると、

「昔は米を作っていたが、キューバ危機で砂糖が入らなくなってから、サトウキビ畑に変わってしまった」との答え。

米軍基地を通じて世界のうねりと密接につながらざるを得なかった沖縄は、産業面でも冷戦の波に翻弄

されていたとは。

グローバル化は今に始まった話ではないということか。

■ 辺野古新基地建設の断念を求める県民集会 会場

北部方面への旅を予定していた9月5日（土）は、キャンプ・シュワブ正面ゲート前で「辺野古新基地建設の断念を求める県民集会」（午後2時）が開催される日でもあった。

会場に近づくにつれ突然のスコール。会場前に車を止め、横断幕や幟旗がはためく一帯を通り、地元の人々の声を聞く。

翌日の琉球新報には、「3800人、新基地・安保法案NO シュワブ前県民集会」の記事が。



阿部先生の背後には大型の米軍車両が



大浦湾より対岸の辺野古崎を望む

■ 古宇利島・古宇利オーシャン・タワー

辺野古崎から羽地ダムを通って、沖縄北部を縦断。太平洋側から東シナ海側へ。

海岸に近づくに連れ、サトウキビ畑越しに、エメラルドグリーンを基調とした色鮮やかな沖縄の海が広がる。

屋我地島を通り、古宇利大橋を渡る。

橋の両側に海が広がる。あまりの美しさに目を奪われる。美しい。綺麗だ。

橋を渡りきると、無料（！）駐車場があり、家族連れが磯遊びをしている。

沖縄に来たら、絶対立ち寄って欲しい絶景ポイント！



古宇利オーシャン・タワーから古宇利大橋を望む



暑い中、熱い黒糖ぜんざいに舌鼓を打つ阿部先生



沖縄戦当時、実を粉に挽いて食糧にしたソテツ



■ 世界遺産—今帰仁（なきじん）城跡

沖縄の城（グスク）はどこも美しい。

とりわけ、今帰仁城は、城壁とともに、頂上からの眺望が美しい。

「無料ガイド、所要時間 50 分」の看板が目に入る。

脚の心配があるので、「まず行けるところまで行きましょう」ということで、ガイドの上間さんの案内で、登り始める。

辺野古にも寄ってきたというと、

「沖縄の人間は我慢に我慢を重ねてきましたよ。しかし、もうマグマが溜まって噴火寸前ですよ。コザ暴動、知ってるでしょ？この小さい沖縄に、日本全体の米軍基地の75%があるんだから」と、上間さん。

上間さんの言葉巧みな説明を受けながら、なんとか頂上へ辿り着く。

「上間さん、グスクの定義はなんですか。いろいろな書物を読んでも、明確な説明がないんですよ」と阿部先生が鋭い質問を発する。

待ってましたとばかりに、上間さん、

「グスクというのは城塞のことですよ。今残っているのは大きなものですけど、琉球王国に統一する前は、何百という小さなグスクがあって、覇を争っていたんです」

「うーん、なるほどそうでしたか」

と納得顔の阿部先生。

上間さんの特別な計らいで、今帰仁城でも神聖な場である「火の神を祀る祠」の中に入れていただく。沖縄の旅が実現したことへの感謝と、旅の無事、阿部先生の脚の快癒を祈る。

ほどなく、上間さんは私たちを放り出して、若い女性の旅行客に話しかける。笑顔を振りまき、熱く語り始める。

「まったくしょうがないなあ。気にしないで降りますか」ということで、ゆっくりと案内所に戻る。

そこで、もう1人のガイド、実戸さんに会う。

阿部先生のなまりがなつかしくて、話しかけてきたらしい。

聞けば、石巻出身という。

この地が気に入って、退職後奥さんと移り住んできた、とのこと。いいなあ。しばらく、話し込む。



ガイドの仕事を心から楽しむ上間さん



火の神を祀る祠」にまつわる説明に耳を傾ける



香川県から来たという女性二人連れにシャッターを押してもらおう。
 今帰仁城から美しい曲線で形づくられた石垣とその下の集落、そして、海が見渡せる。
 海はエメラルドグリーンから群青へと変わり水平線へとつながっている。

■ 沖縄美ら海水族館

沖縄旅行といえばここ、沖縄美ら海水族館。3匹のジンベエザメが回遊する大水槽は圧巻。
 自撮棒を手にした中国人観光客の多いこと、多いこと。長居は無用。この日の日程を早仕舞し、宿に向かうことにする。



■ 残波岬ロイヤルホテル

H I Sからの直前の予約確認で、「残波岬は喫煙可は今のところ和室しか空いていませんが、よろしいですか」との連絡。

あまり深く考えず「構いませんよ」と答えた私。

それが、予期せぬトラブルを引き起こすとは。

ホテルのフロントでチェックイン。

ところが、

「和室なんか、絶対だめだよ。立ったり座ったり、大変なんだがら。なんだや、わがってっと思ったのに。」

阿部先生は切れる一歩手前。

「空いている洋室はありますか」と私。

「スタンダードはあいにく満室です。スイートなら空いていますが。」とフロントの新垣さん。

「んで、和室でいがす」、阿部先生。

ということで、4階の和室へ。

入り口に段差、床の間や縁側なし、8畳ほどの狭い空間。カーテンを開けると、目線の高さに広がるコンクリート屋根。

「なんなんだ、一体これは！」

普段ベッド生活の阿部先生には厳しすぎる環境。

フロントに連絡し、やむなくスイートルームに変更。もちろん追加料金（二人合わせてわずか10,800円也）を払って。

これが、「ひょうたんから駒」、いやいや「ケガの功名」「災い転じて福となす」か。

最上階からの眺望は最高。

リビングに、ベッドルーム、和室、浴室、トイレ。

テレビは全部で4台。大画面でバレーワールドカップ日米戦を観戦。

極楽！極楽！





2015. 09. 06 日曜日

■ 琉球村

エイサーにカチャーシー、琉球舞踊、沖縄民謡、三線、……
最後は、沖縄の伝統芸術に触れる旅。



旧島袋家の座敷で踊られる琉舞のしなやかな動きに、二人ともうっとり。

「この踊りは、うら若き女性が思いを寄せる男性に胸の内を伝えようとするも、うまく思いを伝えられない切ない気持ちを表現したもの」とは阿部先生の弁。

それを確かめるべく、早速、当の本人にアタック。

「これは失恋の踊りではなく、ハッピーエンドの踊りなんですよ」

解釈は少し違ったものの、美しき沖縄女性と話が弾む阿部先生。

続いて、伝統染物の紅型（びんがた）が並ぶ縁側に座り、地元の女性と沖縄の気候やアダンやガジュマルの樹などの話題を交え、あれこれ四方山話。



私はといえば、勇んでカチャーシーの輪に加わったものの、「動きがぎこちない」と阿部先生から厳しい指導。

とまれ、沖縄の風土にすっかり溶け込んだ阿部先生でした。



■ 「道の駅かでな」屋上から広大な嘉手納基地を望む

琉球村と「道の駅かでな」をつなぐ国道58号と県道74号は、嘉手納基地弾薬庫地区と嘉手納飛行場の間を縫うように走る。

道の駅の前には、沖縄の一等地を占領して広大な米軍基地が広がる。民家は基地のへりにへばりつくように密集している。

4階展望台に上る。嬌声を上げ、記念撮影に興ずるのは中国人旅行者ばかり。

この人たちは、果たして何を目的に、ここにやってくるのだろう。



■ 機窓から

14 時 10 分発仙台行の便が、何の連絡もなく滑走路手前の待機場で 20 分間立ち往生。
そして、何事もなかったかのように離陸。

たまらず阿部先生、チーフ・キャビンアテンダントに、
「乗客を不安に陥れるような対応は問題。きちんと状況を説明し、不安を解消するのが責任ある対応と
いうものです」
一言指導を入れる。



勝連半島カンナ岬と平安座島海中道路



気流不安定の中、幻想的な天空の山脈

その後、飛行機は飛ばしに飛ばして、定刻に仙台空港に到着。
阿部先生の一言が効いたに違いない。